

夏の家畜衛生

県畜産課 衛生係

そろそろ本格的な夏がやって来ますが、夏は家畜にとっては1番いやな時期です。特に暑さに弱い乳牛や鶏は吸血昆虫等の襲来なども手伝って、乳量の減少、産卵の低下、ひいては全般的な栄養の障害等をひき起し、経済的にも大きい損失を招きます。特に暑さに加えた蒸熱は全くいやなものです。いろいろと防暑手段を講じてやることの必要は勿論ですが、つぎに夏の家畜衛生上注意すべき点、かかりやすい病気について述べることにいたします。

1、飼養管理上の注意事項

何れの季節でも、家畜の食欲の良否は、泌乳、産卵等と深い関係がありますが、まして夏季は暑さが厳しいために自然と飲水量が増加し、これに反して、飼料の摂取量が減少し、泌乳量、産卵量等が減ってきます。このため、食欲の増進をはかり栄養維持につとめるには、比較的気温の低い時間に採食出来るように、飼料の給与時間を変更する等が必要となります。

飼料はできるだけ、良質のもので消化し易いものを与えることが必要です。また飼料は醗酵し易く、往々変質することがありますから特に注意し、残食したものは取捨ててこれを食べさせないようにします。飼槽等もできるだけ手まめに掃除するように心掛けることが大切です。飲水量も多くなりますが、できるだけ井戸水等の新鮮で冷たいものを利用することも必要です。

鶏では夏場はよく緑餌が不足し勝ちですが、特に高温はビタミンAの消失を助長しますから、十分緑餌等を給与してビタミンAの補給につとめることが大切です。

2、昆虫類の防除対策

蚊、蠅、ブユ、アブ、シラミ、ダニ、ヌカカ等夏場の昆虫は非常に多く、家畜に直接、間接に種々の被害を与えます。特に安眠の妨害、吸血更には各種の病原体を媒介し、栄養障害をきたす大きな原因と

もなります。このうち蚊は流行性脳炎、めん山羊の腰麻痺の原因となる糸状虫の幼虫を媒介し、ニワトリヌカカは鶏のロイコチトゾーンの原虫を媒介します。また、ダニは牛のピロプラスマ病の原虫媒介の役を果します。

これ等昆虫類の駆除には、DDT、BHC等の殺虫等、或は忌避剤の散布、溝、下水の清掃等によってその発生の根源を絶つことが必要です。

3、家畜の夏に多発する疾病の対策

(1) 二等乳

二等乳は70%アルコールに凝固するもので、この中には高酸乳、低酸度二等乳、異常乳の3つがありますが、このうち、高酸乳、異常乳は特に夏場に多発します。

高酸乳は搾乳後に於ける牛乳の取扱いが悪く、細菌が繁殖して牛乳中の乳酸が増えるために起るもので、搾乳器具の消毒、清掃、牛体、乳房を常に清潔に保つことが必要です。搾乳後の乳はできるだけ速く冷し、また出荷も早目にすることが必要です。異常乳は多くの場合、乳房炎に罹った乳房から分泌されるもので、特に夏季は乳房炎が多発する時期です。乳房炎を予防するためには牛体を常に清潔に保ち、搾乳後には必らず乳房をよく按摩すると共にきれいにし、よく拭くこと。搾乳時間を常に一定に保つこと。できるだけ同一人が搾乳すること。畜舎の消毒等が考えられますが、不幸にして乳房炎になった場合には素人療法をすることなく、獣医師の診断を受け、中途半ばな治療でなく、完全に根絶してもらうことが大切です。

(2) 牛の流行性感冒の予防接種

本年農林省は中国地区の本病発生を予想して居りますが、予防注射をうけて、予防に万全を期することが必要です。

(3) 豚コレラ予防接種

豚コレラは従来は夏場に多発すると言われていましたが、現在では、年間何時でも発生しております。

岡山畜産便り 1962.07

さいわいにして豚コレラの予防注射による免疫は非常に効果があり、然も6ヵ月間は完全に免疫されるため、本病予防には絶対的なものです。接種の方法は離乳後7～10日位で接種しますと、注射後2～3週間で免疫が獲得され、完全に6ヵ月は続きます。

(4) 流行性脳炎の予防接種

豚の黒仔の発生は本病の感染に原因しています。特に初妊娠で本年初めて夏を迎えるものに多発します。これも予防接種によって予防できます。

(5) 豚の伝染性胃腸炎

非常に強い伝染力があり、1度本病のウイルスが豚舎に入ると、まず100%の豚が感染し、非常に烈しい下痢をします。そして、生後7日位までの仔豚は100%死亡し、哺乳中のものも何%かが死ぬか、死なぬまでも、これ等の豚の殆んどがひね豚になります。1度この病気が発生すると、出来た仔豚が次々と死んでしまい、子豚が生産できなくなり、繁殖上大きな被害を与えます。

本病を予防するためには、導入先の状態をよく調査し、購入してきたものは少なくとも2週間位は別棟で飼うようにすることが必要です。

(6) 豚丹毒

豚丹毒菌の感染によって起るもので、人にも感染するので注意を要します。特に魚の生あら等をそのまま給与しますとよく発生しますので、必らず飼料は煮沸してから与えることが必要です。

(7) 鶏のロイコトゾーン病

ニワトリヌカカと言う1mm少々の非常に小さい昆虫が鶏を吸血することによって媒介され、雛では嗜血したり、筋肉等に出血が見られ、緑便(非常にきれいな緑色)をします。産卵鶏は産卵を中止し、冠は非常に色が薄くなってきます。

対策としては、ニワトリヌカカに吸血されないように忌避剤を使用することがある程度効果があります。また、飼料の中に予防薬(フラゾリドン製剤等)を混入することも間接的に効果があるといわれています。

(8) 熱射病

通風等が悪く、しかも非常に湿気の多い場合に多発します。

本病予防のためにはできるだけ畜舎を開放し通風

をよくして、舎内の温度を下げるように心掛けると共に、豚では水浴ができるようにすること。冷たい清水を与えること等が必要です。

(9) ピロプラスマ病

ピロプラスマ原虫が赤血球の中に寄生して発生するもので、普通、牛の赤血球数は1cc中600万程度はありますが、本原虫が寄生しますと100万を割ることもあります。本原虫はダニが吸血する際媒介されますので、放牧牛は少なくとも7日位の間隔で、r、B・H・C等を散布して、ダニを駆除することが必要です。

(10) 蛔虫症

日本の仔豚は生後60日までのものは100%蛔虫に侵されているとまで言われていますが、蛔虫卵が経口的に入って成虫になるまでの期間は、夏場の湿度の高い時には2週間位だと云われています。仔豚、中雛の被家は予想以上に大きいと思われれますので、少なくとも1ヵ月～1.5ヵ月に1回位はピペラジン製剤、またはフェノチアジン製剤を与えて駆除することが必要です。と同時に豚舎は特に清潔にし、毎日床を水洗いしてやるのがよいでしょう。

(11) その他、農薬の被害防止

最近では非常に多くの農薬があらゆる農作物に使用されていますが、特に有機燐製剤の毒力は非常に強く、過去何ヵ年間、毎年のように種々の問題を起こしていますので、農薬の使用時期には十分な被害防止対策をとることが必要です。